



# 開業医、元県医師会長のプロフェッショナルリズムと医学生へのメッセージ インタビュー：小森貴先生(小森耳鼻咽喉科医院)

1班 赤井亮太 浅井雄太 荒井成美 荒井悠 新井雄大 有島拓孝 粟森雅 石岡宏将

## 目的

- ・開業医のお仕事内容を伺う。
- ・開業医であり、また県医師会長という公職に就かれていた先生の二つの立場に於いてのプロフェッショナルリズムについて伺う。
- ・医学生へのメッセージを伺う

このポスターでは小森先生が実践されているプロフェッショナルリズムが「新ミレニアムにおける医のプロフェッショナルリズム」のどの原則、責務に対応しているかを(→新ミレ：〇〇)という形で示す。

## 小森先生の御略歴

西暦	
1979年	金沢大学医学部医学科卒業 金大病院耳鼻咽喉科入局
1989年	小森耳鼻咽喉科医院開業
2006年	石川県医師会長
2012年	日本医師会常任理事

### ①開業医として

ご尊父の癌を機に開業を志す。述べ患者数が76,400人。耳の手術が専門で、開業医としては県内で珍しい全身麻酔ができる手術室を設置した。(新ミレ：医療へのアクセスを向上させる責務)

以来病院につきっきりで病院の隣に住んでおり、開業医としての仕事だけでなく、病院の準備もしている。患者を断ることは無く岐阜県白川から患者が来たことも。開業医になってからは殆ど長い休みを取られたことが無い。(→新ミレ：患者の福利優先の原則)



### ②開業医としてのプロフェッショナルリズム

絶対に良くなります、どれくらいで治りますなどと断言することはできないが、きっと良くなると寄り添う姿勢を大事にしている。諦めてくださいなどと言って、来た患者さんを見捨てることは絶対にしない。(→新ミレ：患者の福利優先の原則)

時には患者に対して腹が立つこともあるが、同じ人間なのでドンと大きく構え、一緒に頑張ろう、ベストを尽くすと言ってあげられないことを大切にしている。

また開業医だと自己中心的で偏った医療になりがちなので副院長二人と交代で学会に行き最新医療を学びできる限り大病院と同程度の医療を施すことを信条としている。(→新ミレ：医療の質を向上させる責務、プロフェッショナルとしての能力に関する責務)

### ③公職に就く医師として

御本人曰く、自分にも他人にも厳しくし、色々ご指摘された結果、医師会長になったのだと思っているそう。

医師の現場の意見は時として権力と衝突することもある。例えば予算が足りないから無理、といったことではなく違う観点から医療を見ることが医師会の仕事である。

個人のレベルで法を逸脱するとただの犯罪であるが、医師会は団結して権力と対峙することができる、それがやり甲斐である。

(→新ミレ：社会正義の原則)



### ④公職者としてのプロフェッショナルリズム

公職に就く以前はより優れた技術を身に付け名医になりたいと思っていた。

しかし医師会の仕事をするようになり感じるようになったことは、法治国家である日本では法を守ることが極めて重要であり、法が他のものよりも優先されるが、現場を見ている医師としてはより高い概念で人や患者を見なければならぬということ。

今はそれが生き甲斐であって楽しみでもある。

(→新ミレ：社会正義の原則、医療の質を向上させる責務)

### 医学生へのメッセージ

- 一、自分の得意分野だけでも大病院に負けないレベルの医療を行うという気概を持ち24時間人を救うという気概を持ってほしい。
- 二、留学して違う仕組みに身を置く人と交流し、世界を広げてほしい。小森先生はここで日本の国民皆保険の必要性を痛感することになった。
- 三、リベラルアーツを6年間を通して学び続け、より人間として自由になり、また大いに悩んでその経験を以て自分を豊かにし、患者に寄り添う姿勢に繋がってほしい。

**「大いに学んで大いに悩んで大いに泣け！」**

### インタビューを通して分かったこと、まとめ

患者に接する医師としては、第一に患者に寄り添う姿勢が極めて大切で不可欠なものである。そこから医師会など他の仕事に必要となってくる視点や価値観が生まれてくるということを理解することができた。

これらの視点を広げ豊かな感性を持つ為にもリベラルアーツを学び続けてゆくことが肝要であるということは、お話を伺う前は殆ど意識していなかった新たな知見であった。

また、同じ医師であっても仕事の種類が違っているとプロフェッショナルリズムや大事にすることも違ってくるということが分かった。

最後にインタビューにご協力いただいた小森先生に厚く御礼申し上げます。

